

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス

No.148
1997.6・7・8

＝巻頭言＝

映像宇宙の中の都市

奈良原一高 / 2・3

■ 第174回大学共同セミナー

都市と視線

一塔からバーチャルリアリティまで / 4・5

■ 法人ニュース / 6

■ 千人会・おたより・追悼 / 6・7

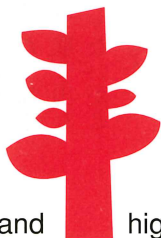
■ 寄贈図書・寄付 / 7

■ 業務通信 / 8・9・10・11

■ 利用状況 / 11・12

■ 開催予告・表紙の写真 / 12

■ 館長室から / 12



Plain living and high thinking

財団法人 大学セミナー・ハウス
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.

映像宇宙の中の都市

写真家 奈良原 一高

都市的構造が埋め込まれている写真

僕は写真家なんですけれども、よく人から「あなたはこういう写真を撮っていますか」と聞かれることがあります。いろんなものを撮っているのでもう一言に言えなくて、いつも「文明の光景を撮っています」と言うんです。そうすると撮っているものが全部入るわけです。全てにおいて、人間が築いていった文明の光景がどこかにあるわけですから。そして、その最たるものは「都市」だと思っています。

写真は、1839年にニエプスが「ぼんやりとした窓から映る景色」を写し止めたのが最初ですが、彼もはじめから写真を作ることが目的ではなくて、製版技術を映像的に発明したいと思っていたんです。それから、写真は分派して一人歩きはじまりました。

写真は都市の産業革命後の色々な科学の発達の構造と強く結びついて派生したものだと思います。海外旅行に行くとき皆さん必ずカメラやビデオを持っていき、美しい海や山を撮ってこられますね。そして、持ち帰って都市であらためて美しい映像化された風景を眺めるわけです。つまり、写真を撮るといふ行為の中には都市的な構造が埋め込まれていると思うんです。例えば、離れ小島にいる人が美しい海を見ても、見るだけで十分なわけですね。別にそこで目の前に見える風景と同じ写真を撮って見比べてみることは必要じゃない。やはり、そこにいない人を見るためのものとして映像は展開してきたと思います。

我々は多元的宇宙に住んでいる

写真というのは、瞬間を止める機能があります。今、僕がみなさんの顔を見てみると、連続して見えているように感じます。しかし

②

生理学者によると、我々の脳には視覚の脳への伝達を高速で遮断する機能があって、瞬間瞬間に部分的に見た鮮明な映像を切り取って、その静止した無数の像を脳の中で積み重ねて全体像を合成しているらしいんです。そうじゃないと、向こうから手前まで全体がシャープに見えないで、ビデオカメラを振らした時のように像が流れるわけです。それは、もとをたどっていけば写真のようなものです。だから映像の基本的な形というのは静止画像だろうと思います。

写真の原理というのは昔からあったのですが、写真の発明は「瞬間の姿」というものを物として残したのだと思います。そして、この物としての写真が生まれてからひとつ妙なことが起こりました。つまり我々の人生というものは、こうやって変転する生きた瞬間がずっと流れていくわけです。それを別の視点で切りとったもう一つの世界が、アルバムなどにずっと記録されて残されていくわけです。それは映像の壁みたいなものが我々の人生と平行してずっと並んでいるみたいな感じになってくるからです。都市でも、瞬間を生きている現実の都市と違うもう一つの都市、映像としての都市が残されている。現実ともう一つの現実（ここからバーチャルリアリティも生まれたのですが）、そういう多元的な宇宙に我々は住んでいるんじゃないかと思うんです。

今日は、その映像で描いていった都市の姿というのを、僕が今まで撮ってきた写真の中から紹介して、お見せしたいと思います。

人間の土地

最初は、「人間の土地」という軍艦島の写真です。軍艦島というのは、長崎県の端島と

いう炭坑の島で、非常に限られた土地の中で二千人が石炭採掘という社会的な目的のために住んでいました。僕が訪れた頃の軍艦島は、東京で5階建てマンションがない頃、すでに11階建てのマンションが建っていて、高層ビルが迷路のようになっていた町でした。都市の姿をそのまま大地から切り離して取り出してみると軍艦島みたいになるんじゃないかという、一つの原型を見た思いがしました。

また、軍艦島と同じ時期に僕が最初に撮ったのが軍需工場の廃墟の写真なんです。都市も色々な歴史の大きいうねりの中で最終的には廃墟になっていく。そうすると廃墟の姿にも美しさを感じないと都市の素晴らしさはないと思えるんです。けれども、僕が最初に見た映像的な光景が、うごめく人間の軍艦島の姿と都市の終末の姿である廃墟だったというのは、都市に対する非常に象徴的な出来事だったような気がします。

ブロードウェイ

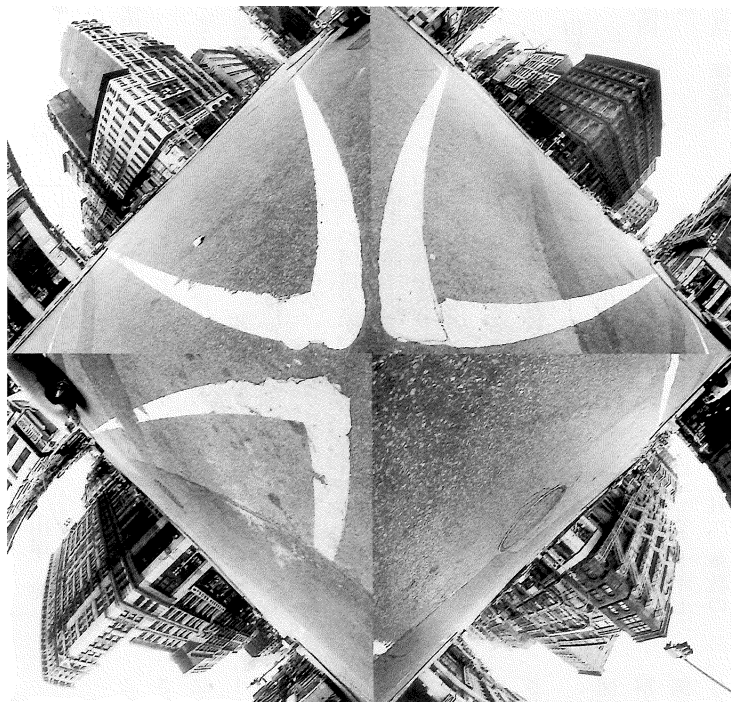
都市が発達していくにつれて道が生れます。その一つの典型的な例としてニューヨークのブロードウェイがあります。

どのようにブロードウェイを見つめるかで僕が工夫したのは、地上30センチくらいの高さにカメラを据えたことです。ニューヨークには犬がいっぱいいて、その目の高さは約30センチで、犬が人間の世界を見ると一体どんな風に見えるかなと思ったんです。ただ、ニューヨークは切り立った建物で180度の視覚がないと収まらないので、魚眼レンズという丸い天空視野のレンズを使いました。それで町のコーナーを見つめた対角線上で四隅から撮った四枚の写真を張り合わせて、一つの写真に映像的空間として合成しました。



奈良原 一高 (ならはら いっこう)
1931年生まれ。写真家。作品に『人間の土地』
『静止した時間』『ヴェネツィアの夜』『プロ
ードウェイ』『ポケット東京』などがある。

なぜそんなことをしたかという、都市には細部と全景という二つの領域があると思うんです。細部を見たい、全景を見たいという両方の欲望、それを一枚の画面で作りたいというふうに考えました。細部についてはレンズの手前10センチの所から写るので、都市の廃棄物、たばこかビール缶があって、生活のにおいみたいなものが觸覚的に出てくる。真ん中の四角形の中にそういうものが埋め込まれている。外側の三角形の四辺の空間には都市の全景があるというダイヤモンド構造を考えました。真ん中の四角の抽象形には張り合わせるまでという映像がでてくるかがわからなくて、非常にエキサイティングでした。



写真集『ブロードウェイ』より

ポケット東京

ニューヨークから帰ってきて、東京はほかの町に比べて変わっている、いわゆる西欧的な現代都市とアジア的なものがミックスしたような感じがしました。そういう東京の片隅を撮ったのが、「ポケット東京」です。もう一つ、都市にはパノラミックな視線があると思うんです。そういう意味では、東京のスカイラインというのを構成した、「東京スカイライン」というシリーズがこのポケット東京と並んであります。都市というものは一筋縄ではつかめない。必ず複眼の視点がその中にはあると思うんです。その複眼の視点のおもしろさが非常に映像的にも魅力的なんじゃないかと思えます。

ヴェネツィアの夜

都市ができてから一番変わったのは夜の光景ではないかと思うんです。人工的な光の世界は別の一つの世界の出現のように思えます。東京のような現代都市になると光の量が多くなって、かえって光が町の中で息づくことが少なくなります。やっぱり闇があるからこそ光があるのであって、全部光に埋まってしまふと、光としての衝撃を感じない。そういう点で、今の東京は陰影のない町になってます。その意味ではヴェネツィアは、夜になるとひとつそりとして、16世紀に戻ったようです。夜

の光景は町の一番素晴らしい光景じゃないかと思えます。

運動する「まなざし」と都市

僕は日本、ヨーロッパ、アメリカと住んでみました。最初にヨーロッパに行ったときに驚いたのは、非常に人工的に世の中が作られているという感じがしたこと。都市計画があつて、あらゆるモノを人工的な世界に作り変えていくという人間の意志を非常に強く感じました。

けれども東京を見ると、未整理の部分が非常に多いんです。都市の中でこんなに夏になると草がいつばい生えて、鈴虫やコオロギの鳴き声があるところはありません。でも、そういうところが未分化都市の生き物のような面白さです。

全体的には現代都市は一つのパターンに近づいている気がしますけれども、細部を見ると各都市の特徴は違っていて面白い。それは、そこに住んでいる人間の心の中の窓といえますか、そういうものが色々と現れてくるからではないかと思うんです。写真というのは、我々の目が一つの肉体の窓であると同じように、モノを見る窓だと思えます。

大別すれば、写真は窓から外を見ている写真と、窓の中の部屋に鏡があつてそこに映った自分の姿を見つめるという自己の内部を見つめる写真と、二つの系列に分けられると思います。しかしその間にいろんな視点の位置があつて、結局、我々は住んでいる一つの部屋の中で窓辺に行ったり、鏡に近づいて己の映った姿を見たり、そういう動きを繰り返しているんじゃないかと思うんです。言ってみれば、都市もそのような構造にあるのではないかと思います。

(文責 編集者)

都市と視線

—塔からバーチャルリアリティまで—

▼ゲスト講演「映像宇宙の中の都市」

写真家

奈良原 一高氏

▼シンポジウム（講義と討論）

1. 塔と人間

——都市の風景と多元的現実——

慶應義塾大学文学部教授

山岸 健氏

2. 都市の空間描写の歴史

——地図と景観画の比較論——

法政大学工学部教授

陣内 秀信氏

3. 裏返るまなざし

——都市の無意識をめぐって——

東京大学大学院総合文化研究科助教授

田中 純氏

4. 近代都市と視線の変容

——俯瞰する眼／運動する眼／偏在する眼——

東京大学社会情報研究所助教授

吉見 俊哉氏

【運営委員】

慶應義塾大学文学部教授

山岸 健氏

法政大学工学部教授

陣内 秀信氏

東京大学社会情報研究所助教授

吉見 俊哉氏

〔参加状況〕 70名21校（男子32・女子38）

慶應義塾（25）、東京（7）、法政（4）、国際基督教・東京女子・東洋（3）、筑波・明治学院・早稲田（2）、お茶の水女子・共立女子・芝浦工業・玉川・東京工業・東京造形・東京都立・東京農業・東京薬科・日本女子・武蔵・立教（1）、その他（7）

セミナーを企画して

慶應義塾大学文学部教授

山岸 健

いま、人びとは、どのような日常的体験のなかで日々の暮らしを営んでいるのだろうか。人びとがよりどころとしてきた多様な現実とは、この現代において、どのように変わつてあるのか。現代の私たちはどのような時間と空間を体験しながら、どのような世界で生きていくのか。いまとここは誰にとってもおおいに問題だが、人間がそこで生きている世界は、今日、驚くべきほどの広がりや深まりと多様性を見せているのである。見ることを初めとして人びとの多岐にわたる世界体験の様相にはさまざまな時代的変化が見られたのである。今日ほど「都市と視線」が身近なモチーフ、テーマとして人びとの視野に大きく広がった時代はなかっただろう。

第174回大学共同セミナーは一九九七年七月五日～六日（土・日の一泊二日）、多数の

④

参加者を得て緑輝く丘の上で開催された。

テーマ都市と視線——塔からバーチャルリアリティまで——、このサブ・タイトルには人間／生活／文化／世界というモチーフが生きているのである。この大学共同セミナーへの誘い、このセミナーの案内のパンフレットの文章の一部をここに紹介したい。

都市とは、視線の場なのです。地図や風景画、都市を描いた写真や映画には、こうした視線の場としての都市を意識的に表現しているものが多数あります。あるいは建築学から都市の文化研究に至るまで、現代の学問は様々なそうした視線の場の成り立ちを考察してきました。今回のセミナーでは、歴史を通じて都市がどのような視線を組織し、またどのような視線が都市を構想してきたのかを考えていきたいと思います。

ゲスト講演では、写真家、奈良原一高氏のこれまでの主要な写真作品が映像で多数紹介され、参加者は生活史に密着した状態での作品についての奈良原氏自身の興味深いエピソードに触れながら、奈良原氏の豊かな映像宇宙で夢のように楽しい充実したひとときを体験することができた。写真の深さと広がりにおいてクロース・アップされてくる都市の驚くべきスペクタクルとイマジユがあるのである。

シンポジウム1では、塔をモチーフとして風景／景観／日常の世界、そして人間とまなざしへのアプローチが試みられた。

シンポジウム2では、歴史的な視点から地図と景観画をモチーフとして、都市空間の理解と表現が試みられたさまざまな興味深い事例と作品が紹介され、まなざしの地平が展望されたのである。

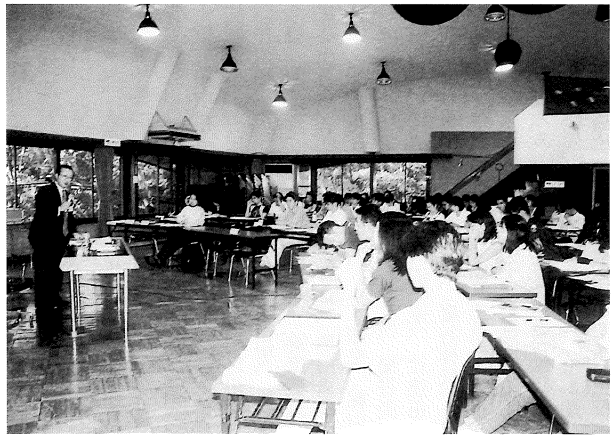


シンポジウム3では、ベンヤミンのアプローチと彼の『パサーージュ論』が紹介され、〈集団の夢の家（＝室内）〉をはじめとして、写真や映画などをモチーフとしたうえで、都市および都市風景へのアプローチが試みられたのである。

シンポジウム4では、現代における視覚メディアの三つの位相としてパノラマ的視覚、映画的視覚、テレビ的視覚が紹介され、さまざまな「まなざし」の様相と地平が数々の事例の紹介によって展望されたのである。

なお、第一日の夜には講堂で懇親会が開かれ、参加者の交流が活発におこなわれた。

さまざまなプリントや映像が用いられながら、プログラムが進み、時代の様相と都市、都市と人間へのアプローチがおこなわれたのである。参加者はさまざまな視点とパースペクティヴ、モチーフを身近なものとしながら、夏の日の丘から日常の世界へもどっていった



何であろうと、人間の姿が見え隠れしているのである。

参加者の感想から

内容を十分に消化できないままになっているように思う。

○都市という、非常に身近であるはずのものにも、様々な切り口があることがわかり、さらにそれぞれの奥ゆかしさにも触れた点でよかったと思う。

○非常に面白いセミナーでした。Interという概念はこれから重要になると思いますが、その概念をもとに、すでに174回を迎えているこのセミナーは先見性があつたのだと思います。

○講師の先生方全員で1時間でもいいからフリー・ディスカッションしてもらえると、尚よかったです。

○セミナー全体の流れは非常に明快だった。ただ、全体討論会は大きく時間をとって、別のコマを設けてやりたかった。

○一人ひとりの個性をかいま見たような気がした。自分の考えに閉じこもりがちなのを、崩すことができた。内容がたいへん充実していたと思う。

○非常に活躍されている講師の先生たちを集めて下さつてありがとうございます。普段著作でしかお目にかかれな先生方の生の声を聞くことは非常に刺激的でした。

○他大学の人たちと話す機会がもてたことが何よりもよかつたと思います。

○たいへん有意義な時間を過ごさせていただきました。学校を離れてすでに3年になりますが、あらためて学問の面白さと奥深さを確認しようです。

○参加者が様々な分野に興味を持っていて、刺激的だった。けれども私自身としては内

容を十分に消化できないままになっているように思う。

○都市というテーマが様々な専攻の研究者の参加を可能にし、非常に有意義だったと思います。専門のみをたどり続けると見落とししてしまう部分を実際かなりあると思われるので、色々気づかされました。

○テーマが非常に面白く、しかも先生方の発表が手抜きがなく熱心で、資料が豊富で面白かつた。また、先生方の分野が適度に散らばつていて、多角的で満足した。

○とっても勉強になるセミナーでした。時間的、経済的な余裕があればもっと参加したい。

○時間的に忙しいと予想していたが、内容も密度の濃いものであつたし、考えるゆとりも持たことで十分満足している。周囲の景観も素晴らしく、参加して良かったと思う。

○様々な視点から、まなざしについて考えさせられました。とても密度の濃いセミナーに参加できて良かったです。

○分野違いの私にとって、今回のセミナーは発見の連続でした。学外の方にこのような形で接した事は今までになく、同世代の人が真剣に学ぶ姿勢を大学に入って初めて見ました。

○大学を越えた人との交流で、今までに味わうことのできなかつた充実感に満ちた2日間でした。素晴らしい先生方のお話が聞けたことに大変感謝したいと思います。

○短期間に、盛りだくさんのテーマの話がうかがえて、大変有益でした。

○とても勉強になり、新しいものに目を向けてみようという気持ちにさせられました。

他の学生とも交流し、考え方など、いい影響を受けた。

○時間軸に沿って順序立ててシンポジウムが構成されていて、「視線」の多様さを知った。個人的には人びとの生活が変わることで視線が変化するという視pointsに最も興味がありました。

○参加者は皆、あらゆる専攻を持つ人達だったが、強い探求心と問題意識を持つ人ばかりで、とても良い刺激を得ることができた。自分の大学内にとどまっているだけでは、決して得られない体験だったと思う。

○今回初めて参加したが、合宿は有意義だと思つた。今回体調により懇親会を早々切り上げたのが悔やまれる。

○一つ一つのシンポジウムがとても刺激的で様々な思いが浮かんだ。

のではないかと思う。

奈良原一高氏の最新作品集『ポケット東京』（クレオ、一九九七年五月）に「街が輝くとき」と題された奈良原氏の文章がおさめられている。ここにつぎのような文章を紹介したいと思う。

東京のマップは広くても、目の前の現実の街がもつ空間感覚のかそけさと小ささは、そこに住む人間の営みに遊園地的な非現実感を忍び込ませてくれるようです。断ちがたく身にまとつたその感覚は、生活領域の片隅に盆栽だけでなくオブジェと化した日用品や生活の軌跡を物語る痕跡の妙などの「風流」を残しています。恐らく僕はそれら現代の風流に心ひかれて道筋をたどつたのでしょう。横丁空間は魔法の小函なのです。

まなざしの地平に姿を見せるもの、それが



第8回諸規定改正検討作業部会

'97年7月24日 / 成蹊大学

【出席者】(委員) 宇野重昭、(法人) 佐野博敏理事長、岡宏子館長・専務理事

●主な議題
パートタイム就業規則の点検・整備

千人会

'97年6月～8月

▼会員数Ⅱ、四一五名

◆会費ありがとうございました

栗原尚子、桜井育子、藤井耕一、長岩寛、徳末愛子、椿弘次、徳永勇雄、和田英一、中島康孝、芳野越夫、江沢洋、小原清成、阿部弘竹内喜代司、古畑和孝、野沢浩、柴田勇造、合田周平、山岸健、吉田宏哲、佐藤進、安宅光雄、神保信一、大村晴雄、村田勝彦、今堀和友、島田淳子、嶺哲之助、見田宗介、宅間宏、二谷貞夫、大内力、小倉充夫、相澤忠一、中山昌、三浦徳弘、本間仁、中村幸安、佐久間まゆみ、水谷眞智子、高橋勇悦、阿久津喜弘、栗林恒雄、市川節子、中山勝博、常行敏夫、長谷川幸男、笹森健、井早康正、原田富士雄、田中裕、長田洋子、林泰造、柳下勇、片岡清子、吉田幸弘、中野スミ子、宮川彰、白井久和、荒井基、金子晃、石川信男、松尾浩也、阿部斉、飯田恵、長清子、詫摩武俊、伊藤小百合、品川孝次、三橋文雄、黒田道雄、松平文朗、永井裕、弦田実、入江和生、綿引二郎、讃岐和家、岡宏子、石井進、扇谷尚、窪田富男、仁科雄一郎、岡沢憲美、辻達也、山西賢、中村浩三、厚東偉介、慶谷伸代、吉田美穂子、築田長世、橋本智、宮本瑞夫、有末賢、藤原鏡男、柏木恵子、松島恵、平出彦仁、林ひろみ、山口重克、藤重重雄、芥川龍男、田島恵児、長浜洋一、三宅彰、山本茂、松尾秀雄、高橋公雄、古本捷治、寺沢徳雄、

おたより

古関彰一、佐藤隆二、井上孝、千羽喜代子、橋本研一、三和治、宮川俊彦、渡辺芳彦、加藤幹夫、中山光雄、仙田哲、梅沢豊、吉松藤子、原誠、森川八洲男、鐘ヶ江信光、大熊徹、谷口雅男、兵頭圭介、鈴木成文、中島文夫、藤原鏡男、原島幸太郎、大野澄子、五十嵐武士、石川達雄、浅井邦二、鹿島健次、大瀧祐子、稲田拓、柳下綱道、鈴木一、市川博、小池滋、桐澤潔、志賀英、八幡義博、石橋秀雄(敬称略)

●新学期の多忙に自分の誕生日を忘れていました。振込みが遅れましたが、新緑の八王子の丘陵を想い郵便局へ出かけます。千人会会員になってもう少しで30年になるのでしようか、自分の人生の過半をこえたことに時のたつ不思議をおもいます。

(日本女子大学附属高校・桜井育子)
●おかげさまでつつがなく消光致して居ります。何かと時間に追われてご無沙汰のかぎり、何卒お許し下さいませ。セミナー・ハウスの一層のご発展を心からお祈り申し上げます。(徳末愛子)

●私は帝京大学の教員となつて6年目を迎えております。東京家政大学大学院と成城大学に出講しております。大妻女子大学では授業外のこと、あるお手伝いをしております。(古畑和孝)

●皆さんのおかげで、今年も元気で誕生日を迎えました。貴セミナー・ハウスの御活躍を祈念致します。

(竹内運輸工業代表取締役・竹内喜代司)
●満72歳を迎え、いま老躯かばいつつ、動いています。(立正大学教授・佐藤進)
●ゆたかな空表情を見ている大学セミナー・ハウスの風景を思い浮かべております。

(慶應義塾大学教授・山岸健)
●英国クランフィールド大学にしばしば出かけ研究協力の具体化に努めています。お陰で

⑥

今回65歳になり、来春には電気通信大学を今年退官します。(合田周平)

●御ころころお便り有難く拝見いたしました。満87歳を迎えました。よろしくお願ひいたします。

(東京都立大学名誉教授・大村晴雄)
●今年4月から現職をひきましたので、少しは暇ができました。(三菱化成生命科学研究所 所名誉所長・今堀和友)

●岡先生の美しい字を見ていたら元気が出てきました。今は、学会、大学、学術会議その他で全力投球しています。少しばかりですが送金できる幸せを感じつつ、先生もお元気で。

(お茶の水女子大学教授・島田淳子)
●古稀の誕生日カード有難う存じます。体調も安定して居り感謝致しております。一度セミナー・ハウスの探ねつくり読書に耽りたい事と思つて居ります。国立大学の利用の少ない事が気懸かりです。(嶺哲之助)

●ますます大衆化・多様化が進む大学に求められる教育方法の改善は、セミ方式に尽きるようです。セミナー・ハウスの役割はさらに光をはなつ時代です。

(上越教育大学教授・二谷貞夫)
●6月8日に67歳の誕生日を元気に迎えたのでB会員として会費をお送りします。

(日本原子力研究所特別研究員・宅間宏)
●年毎に目ざましい発展をされていること伺いながらおよろこびしています最初からの会員です。もう老境に入り余り出かけられませんが、病氣もしましたし目や足も不自由です。若い後輩の御活躍を見ると血が湧く思いです。88歳。(中山昌)

●一昨年から恩師の永野賢先生のご体調が悪しく、恒例の夏期合宿に伺えず、とても残念に存じます。

(日本女子大学助教授・佐久間まゆみ)
●なかなかお出掛けが来ずにおりますが、セミナー・ハウスの丘のことをいつも心の清らかな場所に置いています。ご発展をお祈りいたしております。

(東京女子短期大学・市川節子)

●小生こと日頃ご無沙汰いたし恐縮に存じておりますが、お陰様で満67歳を迎えることが出来ました。現在は地域社会と共に歩みながら微生を尽くしている次第です。

(東京医科歯科大学医科同窓会 サービスセンター・栗林恒雄)
●この処病気で入院しておりますので送金が遅くなり、失礼致しました。

(早稲田大学教授・長谷川幸男)
●数年間、病気で休職しておりましたので、送金できませんでした。本年度から復職しましたので、送金を再開します。セミナー・ハウスの発展と充実を祈つていいます。

(専修大学助教授・常行敏夫)
●誕生日カードありがとうございました。こうして17年を重ねていくことが実感できることはありがたいことです。毎日を楽しく有意義にすごしたいものです。

(早稲田大学国際交流センター・中山勝博)
●千人会が行事を企画できるようにして下さい。一日も早い方が良いと思います。

(電気通信大学名誉教授・井早康正)
●私も喜寿を迎えることになりました。これからは御地に伺う機会も殆どなくなるのではないかと思います。昔時々伺った時の美しいセミナー・ハウスの想い出を楽しんでおります。(中央大学名誉教授・林泰造)

●ありがとうございます。おかげさまで元気でおります。個の確立と共生は、やはりお互いの違いをみとめあつてお互いの輪をかさねてゆきたいと『はなしあい』に努めています。セミナー・ハウスのますますのご活躍を！

(青少年育成国民会議評議員・中野スミ子)
●元気で71回目の誕生日をむかえることができました。停年後行なってきた非常勤講師も徐々に整理して本年度は2ヶ所のみとなりました。

(東京都立立川短期大学名誉教授・吉田幸弘)
●おかげさまで、69歳の誕生日を迎えることができました。

(松尾浩也)
●猛暑となつてしまいました。皆様お身体お

大切に、ご発展をお祈り申し上げます。

(新国立劇場運営財団・飯田恵)

●忙しさもありセミナー・ハウスには参加できませんのでこれにて失礼いたします。岡様お誕生日おめでとう存じます。

(国際基督教大学名誉教授・長清子)

●猛暑にもめげず健康で誕生日を迎えられた事に感謝を致し千人会費を送らせて戴きます。

(洋画家東京学芸大学名誉教授・三橋文雄)

●'95年4月からブラジル、サンパウロ大学の客員教授として大学院生の教育、研究指導に当たって参りましたが2年の勤務を終え先月帰国しました。

(東京医科歯科大学名誉教授・永井裕)

●今日の女子短期大学をめぐる状況には、その存立基盤を揺るがすものがあり、それを乗り切るために、教育・研究の両面で魅力ある大学づくりに努力いたしております。

(大阪薫英女子短期大学学長・扇谷尚)

●このところご無沙汰しておりますが、ハウスのますますのご発展をお祈りしております。

(大東文化大学教授・窪田富男)

●気候不順の御皆様の御健勝を祈り上げます。

(東北大学教授・仁科雄一郎)

●病院通いをしながら何とか暮らしております。おかげさまで私も80歳になりました。

(早稲田大学名誉教授・中村浩三)

●また冬にはお世話になると思います。セミナー・ハウスのますますの発展を祈ります。

(早稲田大学教授・厚東偉介)

●本年も元気で誕生日を迎えました。貴会のお発展を念じます。

(慶谷仲代)

●お誕生日カードありがとうございます。おかげさまで元気で過ごしております。

(青葉学園短期大学教授・吉田美穂子)

●平成10年4月の新入生オリエンテーションでお世話になりました。

(大妻女子大学教授・千羽喜代子)

●会費納入欄で、御縁のあった方々のお名前を拝見するのは嬉しい事です。(橋本研一)

ら大正大学に勤めています。(三和治)

●今年もおかげさまで誕生日を迎えることができ感謝しています。おそくなりましたが感謝のしるしをお届けします。お役にたてて頂ければ幸に存じます。(吉松藤子)

●ご丁寧な挨拶ありがとうございます。

(明治学院大学教授・松島忠)

●お祝の手紙ありがとうございます。いよの御発展をお祈り致します。

(鳥喜商店・藤平重雄)

●71歳の誕生日を元気に迎えました。大学の方は定年となりましたが、これまでの仕事の整理に追われております。(芥川龍男)

●家族で誕生日を祝うという習慣もだんだんうすれ、いまとなってはセミナー・ハウスのごあいさつが唯一自分の誕生日を思い起こす機会となりました。(埼玉大学教授・山本茂)

●昨年は英国にて会費を納めていなかったのですが、本年は2年分をお支払いします。

(日本大学短期大学部助教授・高橋公雄)

●7月に引越しました。セミナー・ハウスが全国規模で利用されるよう願っております。

(名城大学短期大学部教授・松尾秀雄)

●セミナー・ハウスの御活動鳴謝です。皆様の御健勝を祈ります。

(神奈川大学教授・藤原鎮男)

●溢るる緑と思索の径に近く住み、何時も恵に浴させていたいただいております。心から御発展をお祈り申し上げます。(大瀧祐子)

●拙傘寿にお祝辞深謝拜誦、その後も色々な会合で貴ハウスを利用して頂いております。

(鹿島健次)

●今年もどうやら元気に誕生日を迎えることができました。

(早稲田大学名誉教授・浅井邦二)

●世相の多様化に伴い人間としての倫理観の欠如を感じます。セミナーにて多くの人が学び国家的有用な人が増していけることを願っています。館長さん始め皆様のご努力に敬意を表します。(阿部産業(株)・柳下綱道)

●還暦の鄭重なるお祝いの挨拶ありがとうございます。

(志賀英)

●4月から無職の市井之人として再出発しています。3ヵ月ばかり体調をくずしましたが今は回復。三曜会という月1回の社会人の方々との勉強会(7年目)のほか、中高生対象に興味の剣道を続けています。今夏は35回目になる剣道合宿に参加してきました。(石橋秀雄)

(横浜国立大学教授・市川博)

●定年退職後早や5年、在職中には考えられない様な時間的余裕を持って過しています。

●4月から無職の市井之人として再出発しています。3ヵ月ばかり体調をくずしましたが今は回復。三曜会という月1回の社会人の方々との勉強会(7年目)のほか、中高生対象に興味の剣道を続けています。今夏は35回目になる剣道合宿に参加してきました。(石橋秀雄)

(志賀英)

●4月から無職の市井之人として再出発しています。3ヵ月ばかり体調をくずしましたが今は回復。三曜会という月1回の社会人の方々との勉強会(7年目)のほか、中高生対象に興味の剣道を続けています。今夏は35回目になる剣道合宿に参加してきました。(石橋秀雄)

(志賀英)

ございました。わたくしは、教育学を専門領域

にしている関係から教育の原点に立ち返って

自分を造り直すべく、この4月から附属小学校の校長になることにしました。孫のような子らの育成により身近にかかわるようになって、二十一世紀に生きる子どもたちのためにもうひと頑張りせねばならぬ責任感をあらためて感じています。

(横浜国立大学教授・市川博)

●定年退職後早や5年、在職中には考えられない様な時間的余裕を持って過しています。

(志賀英)

●4月から無職の市井之人として再出発しています。3ヵ月ばかり体調をくずしましたが今は回復。三曜会という月1回の社会人の方々との勉強会(7年目)のほか、中高生対象に興味の剣道を続けています。今夏は35回目になる剣道合宿に参加してきました。(石橋秀雄)

(志賀英)

●4月から無職の市井之人として再出発しています。3ヵ月ばかり体調をくずしましたが今は回復。三曜会という月1回の社会人の方々との勉強会(7年目)のほか、中高生対象に興味の剣道を続けています。今夏は35回目になる剣道合宿に参加してきました。(石橋秀雄)

(志賀英)

「生前のご厚情に感謝し、

謹しんでご冥福をお祈りいたします



増田四郎氏(一橋大学名誉教授、元学長、'97年6月22日没。88歳)ハウスの顧問で、草創期には理事長(66、70年)、館長(70、71年)として尽力された。同在任中、「大学と人間」など3回の共同セミナーで講演され、後にその講義録の一つを開館5周年記念論集「西洋と日本—比較文明的考察—(中公新書)」として編集・出版された。'67年以来の千人会員。(写真は'91年4月の顧問会で来館された増田氏)。

上妻精氏(共立女子大学教授、東北大名譽教授、'97年6月26日没。66歳)成蹊大学在職中、「67年以降」実存思想と現代—現代に生きるために—」など2回の共同セミナー

で指導教授を務められ、後にご自分のゼミでも来泊された。'82年以後の千人会員。

福田延衛氏('97年6月27日没。87歳)工学博士として長年山口県の徳山曹達(株)勤務の後、ハウスに近い網ヶ丘に移住。同じ山口出身の近隣の千人会員で画家の故笠井伍朗氏の紹介で'82年に千人会に入会。以後14年間ご芳志を寄せられた。

寄贈図書

'97年6月〜8月

『大学論集 第26集』『高等教育における評価と意志決定過程』『学生像と授業改革』

『大学に教育革命を』 有信堂殿

『AJALT No.20』国際日本語普及協会殿

『八王子技術文化史ノート』かたくら書店殿

『大学の質を問う』資料にみる大学基準協会 五十一年の歩み 大学基準協会殿

『文明と遺産』 福田一郎殿

『ゲーム・アムナート』 大同生命国際文化基金殿

『平和への道すじ』 市東禮次郎殿

寄付

'97年6月〜8月

『一般寄付』 一三、〇〇〇円 東京理科大学・大澤綱一郎ゼミナールOB殿

『植樹』 紫つつじ 二松学舎大学・呉英元ゼミナール殿

『現物』 置時計 一個 第25回十大学合同セミナー 参加者一同殿

丸太材50本 日本建築家協会殿

絵画「島根県出雲白御崎(木本修行画)」 山梨学院大学上野敦男ゼミナール殿

業／務／通／信

97年6、7、8月の合宿研修から

この3ヶ月間の利用状況は、昨年同月間と比較して、5%の減少となった。団体別で見ると、会員校・非会員校・企業・教育団体は25%の増加となった。

▼月別で見ると、6月は13%、7月は23%の減少で、8月は10%の増加となった。6月は、学術・教育団体の利用が倍増したが、7月には非会員校が半減した。8月は、非会員校が18%、学術・教育団体が53%の増となった。▼また今年度5ヶ月間の宿泊延人数の実績は、二二、九六〇(昨年二二、五〇九)人で昨年同期間と比較して2%の減であった。▼次に、この期間に利用されたグループのなかから、①大学院時代にこの近辺の森で調査をされていたという木村さん、②9大学が合同して行なうセミナーの実行委員をされた岡元さん、③充実したゼミ合宿をされた布川ゼミの皆さん、④3週間にわたりスクーリングに通われた通教生を代表して、滞在者の世話役をして下さった延地さん、⑤27年間にわたり「文学の科学」を探索されている文学教育研修者集団の委員長福田さんにそれぞれのグループの紹介やセミナー・ハウスで合宿研修することの意味など、忌憚のないご意見、ご感想をお寄せいただいた。多忙ななか執筆をご快諾いただいた皆さんに改めて感謝の意を表したい。

わたしたちの合宿①

残して欲しい静かな研修環境

―舞い戻ってきた下柚木の森―

農村環境整備センター 木村茂基

農村環境整備センターでは、毎年、「田園計画インスティテュート」という研修会を開催しています。この研修会は、国・都道府県・市町村・諸団体・民間コンサルタント会社等の職員・関連分野を研究している学生ら約二百名を対象に、生態系・水質・景観・住環境・土地利用計画手法・維持管理・住民参加等、農村環境整備に関連した多岐にわたる分野の講義を、大学・研究機関・自治体等に所属する約20名の先生方に行なってもらいます。

研修期間は約一週間で、二百名程度の研修生が北海道から沖縄まで日本全国から一堂に会します。従って、宿泊施設が完備され、二百名を対象に講義ができるような施設が必要ですが、東京広しといえども、なかなかそのような施設はありません。そういったことが可能であるというだけでも、セミナー・ハウスの存在価値は高いと思います。

自然の地形に逆らわない建物

セミナー・ハウスのいいところは、やはり自然の中で寝泊まりして勉強できるというところでしょうか。セミナー・ハウスのある下柚木周辺は丘陵地で、東京といえども、まだかなり自然が残ってい



泊4のための職員・学生のための4泊5日にわたる「田園計画インスティテュート」――講堂にて

ます。自然な地形に逆らわないで建てられたセミナー・ハウスの建物は、使いにくい面もあるかもしれませんが、長期間滞在していると、そのやさしさがよくわかります。林の中になると、下界と隔絶されて、排気ガスも林で濾過されてしまうような気がします。

偶然に舞い戻った森

下柚木と言えば、東京農工大学の波丘地利用実験実習施設という演習林があります。蛇足ですが、私はそこで大学院の二年間、毎月の降雨や林内雨、樹幹流、表面流水などを採取して、小流域の酸性化に関する実験をしていました。大学時代に過ごしたこの下柚木に、偶然舞い

戻って研修会を開催することになり、懐かしくもあり不思議な感じもしています。当時のデータでは、このあたりの雨はかなり酸性(pH4.4)に傾いていて、これではこの下柚木の貴重な緑も心配だと思っただけです。

セミナー・ハウスは静かで空気は林に濾過されていて、学問をする場としてはとてもよい環境だと思います。「大学セミナー・ハウス」には、今後ともこのような環境を守って、末永くがんばってほしいと思います。私も微力ながらなるべく車に乗らないで、下柚木の緑を大切にしていきたいと思っています。

わたしたちの合宿②

大学の壁を越えた 真の勉学の場

――25周年を迎えた十大学合同セミナー――
慶應義塾大学池井優研究会 岡元奈穂

十大学合同セミナーは、一九七三年に大学セミナー・ハウス主催の大学合同セミナーとして発足し、今年で25年目を迎えました。原則的に国際政治・外交史を専門とするゼミの参加によって構成され、現在では発足当時から成蹊大学の宇野重昭ゼミナール、慶應義塾大学の池井優研究会をはじめとした九大学、総勢二百名余りが参加しています。

大学の壁を越えて

このセミナーは、国際政治をさまざま

な視点から研究している学生が大学の壁を越えて集い、一つのトータル・テーマの下で学習し、事実の認識を深め、お互いの意見を交す議論の中で啓発し合い、最終的には自己を発展させることを目的とする首都圏最大のセミナーである、とわたしたちは自負しています。

運営は学生の手に

発足当時は先生主導だったこのセミナーも、今では学生の自主運営となっています。トータル・テーマの設定、このセミナーの活動の中心といえる約10回にわたるセクション会とその総括として行なう大学セミナー・ハウスでの二泊三日の合宿の運営は学生の手に委ねられています。したがって、このセミナーの存続は参加学生自身にかかっている。だからこそ参加学生の一人ひとりが確固たる目的

意識をもって参加しています。

先生方はそんな学生のよきアドバイザーとしてこのセミナーにかかわって下さいます。オープンセクション会ではその年のトータル・テーマに深みを与えてくれるような講演会を、また総括合宿では学生と一緒にディスカッションに参加すると同時に、わたしたちが作成した基調報告についての確かなコメントを加えて下さいます。

勉強のおもしろさを体験

わたしたちは普段あまり接する機会のない他大学の先生方との交流を通して、多角的な「ものの見方、考え方」を養うことができます。このセミナーが学生の自主運営になったとはいえ、他大学の先生方との学術交流の場であることはこの四半世紀変わらない伝統であり、今後もし引き継がれていくだろうと思います。

わたしが受験勉強ではない「勉強」というものを初めて知った所、それが十大学合同セミナーでした。わたしはここで勉強のおもしろさ、難しさ、こわさに初めて気づきました。しかし、勉強面だけではありません。わたしは大学の壁を越えたところで人生について相談できる恩師に出会い、本音で語り合うことのできる一生の友人に出会いました。本音の意欲での勉強、恩師、友人、新しい自分に出会えるところ、それが十大学合同セミナーだとわたしは思います。(第25回十大学合同セミナー渉外担当)

わたしたちの合宿3

セミナーハウスこそ

第2のキャンパス

山梨学院大学法学部布川玲子ゼミナール

我がゼミ恒例の夏期ゼミ合宿を台風一過で蒸し暑さを感じられる中、大学セミナー・ハウスで行ないました。学生相互の議論、発表にも熱が入り、例年以上に実りある合宿となりました。

打ち解けた夕食後の語り

八王子・野猿峠の頂上に広大な土地を有し、ひとつのキャンパスを形成している大学セミナー・ハウス。数々の施設が立ち並び、多くの大学生がここに集い、ゼミ活動を日々繰り返している。いわば

こここそが、私たちにとって第2のマイ・キャンパスなのです。

当日は明星大学や中央大学の学生さんたちと食堂で一緒にになり、他大学の方と交流する機会にも恵まれました。夕食はハッシュ・ド・ビーフにコーンスープのセット。先生と食事をしながらこれまでのゼミ発表を反芻したり、ラウンジでの語りでは、普段講義室ではあまり聞けない話なども披露されたりと、合宿によってゼミ内、お互いの距離がぐんぐんと近くなりました。

テレビもない静かな環境で

入浴をすませて外へ出ると、夏の夜ということもあり、火花が大輪となっており、多摩ニュータウンの夜景が美しく見え、夕方鳴いていたセミの音が、今度ばかりはかすかに聞こえる遠くの盆踊りの音楽へと変わる。テレビやステレオなど一切ない、静かで勉強中心の好環境のこの地で過ごした二泊三日は、間違いなく自分の学生生活の良き思い出として一生残るであろうと、痛感したものです。

「民族問題」「安楽死問題」「理想の教師像」などをめぐって白熱した討論をし、初日のゼミを終えたのは夜の10時をまわっていました。その後も、教育実習の体験談や旅行の思い出話など、話題は尽きることなく、「話す」「聞く」「考える」のゼミ合宿を存分に堪能することができました。

専用給湯室付きで冷暖房も完備され



9大学200名の学生たちのまとめ役をした実行委員のメンバーたち。——中央セミナー館にて



ゼミ合宿を存分に堪能した学生たち。前列中央が布川玲子助教——記念館のセミナー室にて

た、20周年記念館セミナー室Aは、愛着の持てるまさに最高のステージでした。「理想は高潔に。生活は簡素に」という標榜を掲げた大学セミナー・ハウスは、決して豪華とはいえずとも、等身大の気軽さを持っていて、その気取りのない雰囲気がいかに心地好いものです。

来年度もきつと後輩たちがここを訪れ、布川ゼミの伝統を引き継いでくれることと思います。

学生数は男子36名、女子30名位で、出身地は北海道から沖縄までの各地から来ている。大学での授業は一般教養科目から法律科目まで、熱意あふれる教授と勉強するわれわれの面接授業が終日続く。不合格に涙しながらレポート作成毎週日曜日に修得科目の試験が行なわれる。この受験資格を得るには、約二千字のレポートを二通合格させなければならぬ。これが大変で、一度ではなかなか合格しない。夕食後、真夜中までの時間、または四時に起床して朝食までの三時間を不合格に涙しながらレポートを作成している学生がたくさんいる。

学生の中には、幼児を育てながら都合をつけて参加している者や、忙しい勤務の中で日頃の誠実な勤め振りを評価され、やっと許可を得てきた者等、みんなそれぞれ事情を持っている。勉学の動機もさまざまである。はるか昔に抱いた向学心を年を重ねてやっと手に入れた者（実は私もそうである）。また、家庭と安定した職場を持ちつつも、いまこそ勉強する時とみて司法試験を目指している若い学生たちなどである。対話してみるとその源泉にふれ、大いに共感する。

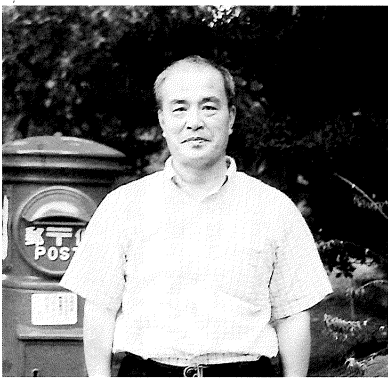
わたしたちの合宿4

温かいハートに

包まれた学習生活

中央大学法学部通信教育部 延地 忠

私たちは毎年七月末から八月半ばまでの三週間で、この自然に恵まれた野猿峠の大学セミナー・ハウスで合宿している。私は昨年と今年、中央大学グループの村長をさせてもらった。



3週間にわたる共同生活の世話役をされた延地さん——本館前広場にて

山小屋風のロッジでの生活

この背後にはセミナー・ハウスの皆さんの温かいハートがわれわれを包んでいて下さるからこそと確信する。

私はあと二年で卒業しようと思つてい。あと二回この合宿生活を味わうことができる。その後もわが大学のここでの合宿は続いていくことであろうが、このすばらしい体験は何らかの形で必ず社会のために還元されていくものと思う。



100回を迎えた文教研の記念集会和挨拶する岡館長——講堂にて

わたしたちの合宿5

27年間追及し続けた

「文学の科学」

文学教育研究者集団・福田 隆義

今年の第四六回全国集会（八月五〜七日）では、大学セミナー・ハウスを会場にした合宿研究会、一〇一回を記念する集会を開催。それはまた、合宿二〇〇回を目指すレセプションでもあった。文教研（略称）が、セミナー・ハウスを初めて研究会々場に選んだのは、一九六九年十二月、冬の合宿からである。以降、全国集会はもちろん、内部合宿の会場も、セミナー・ハウスに確定。

この間に、全国集会の日程の一部が、セミナー・ハウスの行事に位置づけられたりもした。もちろん、私たちの全国集会はあの広島を意識し、日時を設定した。その意義が生きる恒例行事としてである。八月六日午前八時十五分、教師館屋上で、広島からの参加者が「真理の鐘」を点鐘、当日の合宿者一同平和を祈念する。

緑の風の中で学習

合宿会場をセミナー・ハウスに確定したのは、いくつか理由がある。まず、宿泊施設が清潔であること。以前は、お寺の本堂で蚊にさされながらの寝。研究会々場は村の小学校。そんな合宿を重ねてきた私たちには、奇麗にセットされたベッドは、眩しいくらいだった。また会場までの時間も節約できた。

二つめは、環境が学習に適していること。「緑の風の中で学習することがいいのです」これは、前館長さんの弁。二十数年前、ここからの眺めは、素晴らしかった。南も西も多摩の丘陵がつづき、その向こうに四季折々の富士が展望できた。まさに緑の中にいる、そう実感した。ところが、七十年代の終わり頃だったと思う、ブルトーザーが入った。みるみるうちに丘陵は禿げ山に変わり、住宅が建ち並んだ。なかでも、南側のビル軍(群)は手強い。我がが学舎に攻め込んでくるようだ。最近では、防衛線がどこにあるのかがかりでならない。

三つめは、私たちの階層でも負担できる、宿泊・施設使用料金であること。今ではもう街には立派な施設がたくさんある。が、それらは懐と見合わない。

人間の科学としての「文学の科学」

ところで、一〇一回も合宿をつづけて、何を研究してきたのか？その問いには、文教研の生みの親であり、育ての親でもある、故・熊谷孝先生(国立音楽大学名誉教授)を語らなければならない。先生は、哲学史から文学教育にいたるまで、学問領域は驚くほど広く、しかも深かった。が、ご専門は文芸認識論。先生は、文芸認識論を「文学の科学」の一面として位置づけていた。いうまでもなく「文学の科学」は、人間の科学であり、社会科学の一つの対象領域だという発想で構想されていた。

熊谷先生は「文学の科学」を私たちがいめいがより確かなものにするために、いつも新しい視点を留意、研究を先導して下さった。たとえば、文学史研究では「現代史としての文学史」という概念を提示。先生の言葉を借りるなら「いわゆる意味の文学史といわゆる意味の文芸時評とを現代史の要求に応えるものとして統一する」概念としてであった。

先生が亡くなられて、もう五年になる。先生の学問精神を継承し、先生の学問水準を越えることが、私たちの課題。合宿二〇〇回、さらには三〇〇回を目指す理由である。

利用状況

'97年6月~8月
*11回2回利用
日帰りを除く

■6月(64グループ、延二、八二二人)

- 東京学芸大学教授 松本 良夫
- 東京都立大学建築学科新入生合宿
- 中央大学教授 今川 健
- 立教大学栗原・佐々木基礎文獻講読
- 東京学芸大学講師 栗原 裕次
- 明治学院大学教授* 宮野 彬
- 駒澤大学教授 竹内 啓一
- 東洋英和女学院大学教授 朝倉 孝吉
- 杏林大学新入職員フォローアップ研修
- 学習院大学教授 小谷 正博
- 東京都立大学教育研究室 横畑 知己
- 東京経済大学助教授 早田 幸
- 中央大学生相談室
- 早稲田大学助教授 早田 幸
- 東京学芸大学障害児教育学科新入生合宿
- 研修
- 東京学芸大学教授 中山 昌久
- 立教大学教授 栗原 彬
- 共立女子大学総合講座「社会と女性」
- 明治学院大学教授 熊本 一規
- 東京学芸大学教授 藤平 育子
- 一橋大学教授 伊豫谷登志翁
- 東京学芸大学障害児教育学科三年生合宿
- 研修
- 帝京大学「明日の会」
- 一橋大学教授 児玉谷史朗
- 共立女子大学教授 入江 和生
- 武蔵工業大学助教授 皆川 勝
- 東京理科大学教授 狩野 紀昭
- 東京理科大学教授 志水 英樹
- 東海大学教授 師岡 孝次
- 日本大学映像芸術研究会
- 東京工業大学教授 飯島 淳一
- 駒澤大学助教授 谷敷 正光
- 日本女子大学附属高等学校
- 早稲田大学教授 那須 壽
- 帝京科学大学助教授 小川 家資

■7月(63グループ、延二、二二六人)

- 東京造形大学教授 星野 隆三
- 墨田川高等学校
- ルーテル学院大学教職志願セミナー
- 阿佐ヶ谷美術専門学校
- 生化学若い研究者の会
- 第173回大学共同セミナー
- 第25回十大学合同セミナー
- 日本・パキスタン協会
- 第18回日豪合同セミナー
- 日本建築学会農村計画委員会
- ゼロ会
- ワークショップセンター
- 運動学習研究会
- ルソール合奏団
- 国立病院東京災害医療センター附属昭和の森看護学校
- 東京中央教会留学生会
- 大阪からだところの出会いの会
- 環境プロデュース**/中央包装機/ハイトアンドカラー/色彩学校/ヒューマンライフセンター/農村環境整備センター/綜研化学(個人利用)
- V研究会*
- 東京学芸大学助教授 吉本 昌司
- 学習院大学教授 菅 忠義
- 埼玉大学水泳部
- 立教大学教授 小西 正捷
- 東京農工大助教授 直井 勝彦
- 恵泉女学園短期大学総合科目「国際」
- 成蹊大学教授 宇野 重昭
- 一橋大学教授 水岡不二雄
- 明治大学講師 宮崎 豊
- 東京工業高等専門学校日豪学生交流会
- 立教学院年史編集委員会
- 杏林大学国際交流研究所
- 中央大学大学院総合政策研究科
- 東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄
- 千葉大学教授 菅原 憲一
- 東京大学教授 見田 宗介
- 一橋大学教授 田崎 宣義
- 中央大学教授 高橋 薫
- 中央大学エクス・マルセイユ第三大学短期留學研修会
- 中央大学教授 南原 一博
- 武蔵大学講師 中西 祐子

●●● 館長室から ●●●

秋もたけなわ、樹々の葉は色づきはじめ、ハウスの構内は豊かな彩りの時を迎えました。裸木が青空を突きあげ、ユニット・ハウスへの小径で落ち葉がかさこそとなる、詩的な情緒にあふれる初冬風景も間近でしょう。

自然のもたらすこの彩りの変化は、研修の場としてのハウスに、心の豊かさにつながる条件を与えてくれますが、他方、便利な設備に馴れた人にはとても「豊かさ」とはつながらないかも知れません。

便利で快適な施設に豊かな自然の変化が加われば、鬼に金棒なのでしようが、冷えきった今の経済状況では、快適な宿舎を思い切っってドーンと建てなおすことも間々ならず……。そこで、つましやかな事務室の改修と移転を、職員達の手でこの春から試み、内部の者の心機一転、新しい活動への意欲をもちたてようとしておりますこと、お気づきの方々もおありかも知れません。

まず企画室が、図書室を大掃除、汚れた壁を自分達の手で白く塗り上げ、本館から移転しました。佐野理事長と私も、一コマ残しておいた部分の部分を塗って、居心地のよい新構想がわく企画作業室の誕生。これまでの企画室へ総務が、今、皆様をお迎えするフロントが一階部分の配置に知恵をしぼっています。このささやかな職員室の努力が、皆様の研修の場を実りあるものにするお手伝いとなればと願っています。(岡)

表紙の写真はペンシルベニア大学建築学科の「スタジオ・イン・ジャパン」(夏季設計授業)。夏6週間「日本の建築の歴史」を巡って各地を見学旅行した大学院生16名が、今夏も当ハウスでの総括合宿(日本建築家協会の建築セミナーに合流)で2泊。その間引率の丸山欣也・同大学客員教授(写真真正面左端のもの)、それぞれの課題作品のスケッチをラウンジの床に展げて発表しました。

開催予告

●第176回 大学共同セミナー●

バブル崩壊後の企業社会とジェンダー

1997年12月5日～7日(金～日、2泊3日)

◆ 話題提供 (全体講演)

- 企業社会論とジェンダー論の現在
東京大学大学院経済学研究科教授 伊藤 正直氏
- 日本の雇用慣行と女性 明治大学経営学部教授 遠藤 公嗣氏
- 企業中心社会下のジェンダーそして家族
一橋大学社会学部教授 木本喜美子氏
- 女性官僚のキャリアパスと個人生活
元経済企画庁調査局審議官・株式会社住友生命総合研究所取締役生活部長 新村 保子氏
- 企業と個人
ソニー株式会社レコーディングメディア&エナジーカンパニーシニアバイスプレジデント 桐原 保法氏
- 同一価値労働同一賃金で男女差別賃金のは正を
——インターネットで世界へ広がる女性のネットワーク——
ワーキング・ウイメンズ・ネットワーク世話人・商社に働く女性の会世話人 越堂 静子氏

■ 募集人員：約70名 ■ 対象：国・公・私立大学生、短大生、社会人
■ 参加費：12,000円(社会人15,000円)

日本大学大学院社会学研究会	近藤 健	日本大学教授	吉田 達雄
国際基督教大学教授	富永 靖徳	杏林大学中国留学生学生会	
お茶の水女子大学教授	前田 一男	東京大学生物科学専攻院生会	
立教大学助教授	佐久間英俊	明治学院大学教授	辻 泰一郎
中央大学助教授	藤平 育子	中央大学教授	杉山 高一
東京学芸大学教授	西海 真樹	東京理科大学大沢ゼミ	
中央大学教授	吉岡 知哉	淑徳大学助教授	源 昌久
立教大学教授	松丸 和夫	明治大学教授	原 道生
中央大学教授	投野由紀夫	東京学芸大学助教授	河添 房江
東京学芸大学講師	柳原 敦夫	中央大学通信教育部	
桜美林大学教授	町村 敬志	明星大学通信教育部	
一橋大学助教授		駒澤大学教授	寺中 良二
東京工業高等専門学校大韓民国政府派遣		学習院大学教授	高橋 利宏
専門大学生研修		横浜国立大学教授	垣内 隆
上智大学講師	長町 裕司	立教大学教授	渡辺 憲司
東京都立北野高等学校		中央大学講師	木下 徳明
創価大学教授	越智 昇	明治大学教授	森川八洲男
墨田川高等学校		立教大学教授	福山 清蔵
福井工業大学教授	芳野 越夫	慶應義塾大学英語会	
埼玉県立朝霞高等学校*		日本大学教授	根本 忠明
山梨学院大学助教授	布川 玲子	東京学芸大学教授	大熊 徹
神奈川県立津久井高等学校演劇部		法政大学教授	伊藤 玄三
第174回大学共同セミナー		東京経済大学教授	猪狩 誠也
組織神学研究會		東京理科大学教授	狩野 紀昭
郡内研究会		東京工業大学教授	津田 元久
国立病院東京災害医療センター附属昭和		埼玉大学教授	福岡 安則
の森看護学校		東京都立青梅高等学校	三浦 孝夫
日本建築家協会		産能大学助教授	
奇術クラブマジックエコー*		フェリス学院大学室内管弦楽団	
ゼロ会		十文字学園筆曲部	
世田谷区教育委員会		佼成学園高等学校数学研究同好会	
文学教育研究者集団		二松学舎大学教授	呉 英元
東京言友会		晃華学園中学・高等学校聖歌隊	
教育者教育研究所		東京神学大学公開夜間神学講座	
東芝/東京スバル自動車/環境管理セン		恵泉女子園中学校高等学校教職員研修会	
ター/環境プロデュース/クオリティマ		東京都立玉川高等学校演劇部	
ネジメント/国際交流サービス協会		墨田川高等学校	
(個人利用)		亜細亜経営研究会	
V研究会	吉本 昌司	数論セミナー	
深川第五中学校教諭	南出 新治	「社会科学の再検討」研究会	
■8月(92グループ、延六、〇〇六人)		流体若手夏の学校	
東京女子講師	川内 博	合同土壌学セミナー	
東京女子大学助教授	竹内 健蔵	第20回光通信研究会	
一橋大学助教授	尾畑 裕	日本国際連合学生連盟	